

# 佛耶宗論史序說

海老澤有道

## 一 キリシタン傳來の宗教史的意義

我國にキリスト教が傳はつた事は、たゞに日本宗教史に於けるのみならず、世界の宗教・思想史上の最も注目さるべき事象と云はねばならない。それはキリスト教と佛教といふ高度に發達した哲學的異教とが、眞に內的交渉・接觸をなしたのは實に我が國民の間に於いてのみ見得る史實であつて、世界宗教史上他にその類例を見出し得ないからである。

云ふ迄もなくキリスト教が東亞に布教された十六世紀中葉、印度佛教は既に宗教的生命を喪失して居り、従つて同地に布教を開始したゼズ會士の眼には回教と印度教とが極めて素朴な迷信的民間信仰として映じたに過ぎなかつた。その中心人物サヴィエル P. M. Francisco Xavier が一五四七年、マラッカに於いて邂逅し、印度ゴアの學院に學ばしめた最初の日本人キリシタン、鹿兒島の人ヤジロウより得た日本宗教知識も、彼の無學のためにもとより不完全極まるものであり、サヴィエル等が日本來朝以前、佛教に對して抱いた觀念はその書翰等に散見する所によつても回教や印度教乃至は民間信仰に對するそれと、として變るもので無かつたらうと思はれるが、その一面彼等が此の

無學な一日本人を通じてより日本民族の有する文化性と高度の佛教學の存在と、日本人の宗教的情熱とを推知し得たことは、彼等異教拆伏と新地布教との熱情に燃えるゼス會士等に日本布教の最大動機を與へたものであり、ヤジロウの宗教知識の貧弱にも拘らず、世界の二大宗教の内的接觸を齎した機縁として特筆するべきであらう。

註 拙著『切支丹史の研究』昭和十一年刊所收「ヤジロウ考」三四一—三四三頁参照。

當時の日本佛教界は戰國亂離の中に外面的勢威を有するに過ぎなかつたとは云へ、教理的にも典禮的にも既に完成の域に達してゐたものであり、衰へたりとは云へ異教と接觸する時にはなほ強烈な宗教的反撥をなすだけの生命力を保有して居た。而してその生命力も日本民族の宗教信仰に於いて初めて形成され來たものであるのみならず、日本的なるもの、否既に日本自らのものとして民族信仰の基礎をなしてゐたことは、宗教的對立抗爭のみならず、キリシタン宗門が民族的拒否を受けねばならなかつた一つの有力な宿命的因由をなしたものと云へる。且又、室町時代以來の佛教界に於ける宗論の盛行は、天正七年の淨土・日蓮の安土宗論となるに及んで最高潮に達したが、そこには戰國風潮の現はれである鬭争による弊害と共に佛教學が形式に墮した事を否定し得ないであらう。然しそれと共に因明護法論の發達を促したことも云ふ迄もない。かゝる時にキリシタンなる新異教が傳來したことは、佛教護法史上に於てはまさに絶好の機會であつた筈である。

一方、キリスト教側に於いても嘗てギリシヤ、ラテン或はゲルマン的異教をも包容したカトリック教が福音主義による反抗に對して自己の教理的再認を迫られ、トリエント公會議（一五四五—一五六三）によるカトリック教義の組織的再建の完成により極めて強い排他的性格を有するに至つてゐた。しかも日本布教に登場したゼス會士等は對抗改革の第一線として軍隊的會憲の下に異教を拆伏せしめ止まぬ氣概を有して居り、その組織的教育に於いて、雄辯

術と對話術の訓練とは司牧神學として必須課目となつて居り、我國にてもゼス會教育機關の整備する以前に於いてすら既に入會した邦人會士に宗論辯神の訓練をなしてゐたことは最初の邦人教師イルマン・ロレンソ *fr. Lourenço* の例を以ても推知し得る所である。註二

註一 辻善之助博士著『日本佛教史の研究』大正八年刊五七〇頁参照。

註二 拙著『京畿切支丹史話』昭和十一年刊一四三—一四四頁参照。

従つて日本に於ける佛教とキリスト教との接觸は傳來初期の相手宗教を摸索する時代を経て、應て相互に完成されたその全貌を露呈し、激しい對立をなすと共に、その全技能知識をあげ相互に他を拆伏せんとして盛んに宗論を闘はしたことは當然のことと云はねばならない。

此の必然的運命として對立、迫害が到る處に激しく行はれ、政府によるキリシタン禁壓策が僅か傳來以來四十年にして下り、餘りに宗教的内的交渉をなすには期間が短かつた。従つて一般に及ぶが如き精神的影響を認め難いが、ゼス會は傳統的に異種文化との順應的布教策を採つて居り、初期には認識不充分のためにも天主を大目と稱するが如き有様であつたから、日本佛教界に天竺渡來の佛法の一つとしてキリシタン宗門を迎へるが如き傾向があつたことと、カトリック典禮と佛教のそれとの類似、殊に共に救済宗教、倫理宗教としての類似により、その對蹠的神觀にも拘らず比較的容易に他を理解し得たことも見逃し得ない所である。而して後期に及んでは迫害を通じて一層宗教的内的交渉は年を経るに従つて深化し、元和寛永に至つては殉教の死といふ最も嚴肅な宗教的境地に徹し、世界宗教史上稀に見る華々しくも悲壯な血潮の歴史の頁を展開するに至つたのである。かく殉教に徹底するまで信仰が内的に、絶對的眞理として把握されるに至つたのは我が武士道的精神より出づる理解が與つてゐることは既に論及したことが

あるが、それと共に此の日本人の有する宗教的素地に養はれ來つたことを認めねばならない。しかも亦一面、武士的時代であり乍ら多くの教外者はキリシタン信徒が勇躍死地に赴くのを怪しみ、且つ不届きなことを觀じ、キリスト教の本質の一たるキリストの「救贖」に興かり、又自己の成幸による他の靈魂の救贖なる宗教信仰を理解出來なかつたことを知らしめられるのである。

註 『切支丹史の研究』所収「武士道と切支丹との倫理思想的交渉」参照。

宗教交渉としてかゝる最も第一義的分野に對しては從來殆ど考慮がなされず、キリシタン研究の多くは南蠻文化に對する興味から文化運動として見られたに過ぎず、偶々思想的に取扱はれることがあつても非科學的な、非歴史的な鎖國的先入主觀に基づき、且つそれに附隨せる外形による價值判斷と歪曲せられた史料に依る批判とに甘んぜねばならなかつた。しかし、何よりも先づ「宗教」として第一に見、取扱はれ、考究せらるべきである。その考察理解なしに、キリシタンの宗教運動に附隨する諸文化、或ひは影響等を論ずることは正しい方途ではあり得ず、從つて亦正當な批判をなし、結論を導き出す道ではあり得ないであらう。然し乍ら之等宗教の内的交渉は信徒の外面的行爲信仰態度のみならず、心の内奥にまで入つて分析吟味せねばならず、キリシタン時代については遺憾乍らそれらを語る資料は極めて僅少であり、それにもとづいて教理神學的立論をなすことは到底私如き者の及ぶ所ではない。

よつてキリスト教々理神學的分野よりの考究としては、キリスト教が日本に傳來してより、日本人の有つ神儒佛の素地と宗教的・精神的に「觸發」し、史的展開をなしたことによつて、キリスト教に於ける日本獨自の神學的體系としての日本類型が成立したことを提唱して居られる魚木忠一氏の「日本基督教の精神的傳統」(昭和十六年刊)なる日本キリスト教思想史上劃期的な名著に凡てを譲ることと致し度い。たゞ私は以上述べた如き觀點から先づキリシタ

ン宗門と佛教との接觸交渉の一面として、宗教思想史的研究の將來への一素材として宗論の形に記録された主要なものを採上げ、紹介して置きたいと思ふのである。

## 二 史料としての宗論記録

宗論、殊に宗教として相互に理解し接觸した宗教家自らによるそれは、他のものを通じて見るよりは比較的純粹に相互の宗教的交渉を語る筈のものではあるが、一面それだけにこそなほ多くの支障が史料的に附隨するのを避け難くキリシタンと佛教との宗論に於いては殊更さうである。

先づ第一に宗論が安土宗論の如く公的のものは無いために、その記録が極めて僅少であり、且つ具體的でないことである。僅かに永祿十二年に織田信長の御前に於ける朝山日乗とバネ・テレ・フロイス P. Luis Frois 及びイルマン・ロレンソとの宗論が稍公的なものであるに過ぎず、しかも之さへ日本記録には全く見えぬ程であるから、私的宗論が記述さるべくもない。從つてたゞに佛耶宗論として記録されたものに限らず、宣教師の書翰に現はれてゐる佛教に關する記述、見解、儒耶宗論及び宗論の形で書かれた關邪排耶書、或は我國にも輸入された明清天主教書及び關邪書等をも併せ参考せられねばなるまい。

第二に宗論記録は正確な記録ではあり得ず、殆ど凡ては記録者の宗派的偏見を以て書かれて居り、他を排斥する目的によるか、或は自派辯護、自派勝利の宣傳のためか、何れにしても歪曲せられてゐるものが多い。從つて兩派の記録、又は第三者のそれが對照されねばならないが、此處に取扱はんとする佛耶宗論に於いては、現在私の知り得る限りでは同一宗論を兩教側で記録したものも、第三者のものもなく、一方的解釋のみしか示されてゐず、他の場合とい

ふより全體を通過して初めて眞の交渉理解程度を推知し得るに過ぎず、理解程度的發展過程は之によつては殆ど指摘し得ないのである。但し一方的記録しかないことは敗れた側ではそれを敢て黙視してしまつたと見られる場合のあることは云ふ迄もない。

第三に宗論者が互ひに他を理解せんとするよりは、他の缺點、弱點を觀破しようとする傾きが強く、ために相互に警戒心が働いて言辭が抽象に流れ、教理的に深遠であれは益々極端な象徵化がなされ、言辭の末端を以て論争を闘はすが如き場合が多い。それだけに單純な言葉に宗教的深遠高大な意味が含まれることが多く、宗論の展開が我々門外漢の理解より遙かに先に進んでゐる場合も少なくない。我々から見ればつまらぬ些細な事、僅か之位の事と思はれるやうな事柄、言辭が意外に大問題であつたりするものであることは安土宗論の例等を見ても窺ひ知られよう。キリシタン教會側記録に我國佛僧及び識者がキリシタンの單純な創造神觀或は靈魂論の解説によつて忽ち改宗してしまふやうに書かれてゐることも、もとより創造主宰神信仰は佛教に於いて有せぬからでもあるが、記録に現はれた如き單純な記述のまゝに解すべきものではないと思はれる。寧ろ日本人の宗教的直觀力をそこに認むべきであり、その單純性の中に却つて宗教理解の深きことを知るべきであらう。

第四に相手教理典禮を生半可の理解を以て斷定を下し或は讀解してしまふ場合ももとより多いことを認めねばならない。即ち相互の無理解のために各自が全く正反對の結論を考へてゐるやうな場合も少なからずある。例へばサヴィエルが鹿兒島の禪宗福昌寺を度々訪ね、住持忍室 Ninji と親しく交はる仲となつたが、某日衆僧が座禪してゐるのを見てサヴィエルは「何を默想してゐるか」と尋ねると忍室は微笑して「或者は過去二三ヶ月に信徒から得た收入高を胸算用し、或者はより立派な袈裟衣やもてなしを何處で與へられようかと考へ、或者は俗的快樂の事を考へてゐる。

要するに意義ある事を默想してゐる者は一人もあるまい」と答へ、又サヴィエルの人生航路に關する問ひに對し入港すべき港が何處にあるか一向存せぬ等と答へた。この禪僧の磊落な答をサヴィエルも之を記述せるフロイス始め凡てのエウロップ人教會史家も此の言のまゝに理解して居り、ために佛教々學の貧困と形式的墮落と見てしまふが如き例である。

註 Frois, L., Die Geschichte Japans (1549—1578) Leipzig 1926, S. 6—7.

第五に相互の認識不足、誤解があるのみならず、外國に傳へられた史料は轉寫の間に轉寫者の誤解、誤讀、誤記に依り益々誤謬が多くなつて行くことで、甚だしきは天臺宗 Teitoku が浄土宗 Zentsu と改惡されてゐる場合すらあるのである。従つて史料の僅少の上にそれらを所收してゐる稀觀の諸史料集、書翰集を對比吟味する必要がある。

註 Cartas do Japão Euora 1598, l. f. 70v; Novevi Avia delle Indie di Portogallo, Venuti nuovamente degli R. padri della compagnia di IESV. Quarta parte, Venezia 1665, f. 29v. 又は『京畿切支丹史話』七七頁參照。

以上の如き若干の支障も存するが、少しの注意さへ拂へば宗論は——殊にそれが公的のものがないだけに却つて——佛耶の直接交渉の比較的純粹な姿を現はしてゐるものとして取扱つても良いであらう。而して初期のものは政治的先入主がなく、且つ相互の無理解から却つて宗教的に赤裸であり、後期のものは偏見もあるが、内的に深められた點もあり、夫々取るべき特性を有してゐる。

### 三 三なる佛耶宗論とその資料

確實な記録に見える佛耶宗論は既に述べた如く極めて僅少であるが、傳來以來キリシタンと佛教僧俗との間には非

常に數多くの宗論がなされた筈である。凡てが佛教信徒である所に新宗門が理解されるためには宗論は必須のものであり、キリシタンに入信する者は何等かの形で必ず宗論を行つた筈である。サヴィエルも天文二十年(一五五二)春、山口に布教を開始した當時の有様を次の如く傳へてゐる。

多くの人々が新宗教を聴聞するために我々の住院を訪ねて來た。我々は日に二回説教し、説教後は常に長い間宗論が行はれた。……數日の宗論と質疑の後、彼等は遂に自らキリシトの信仰に従ふと申出で始めた。その中の最初の人々は宗論及質疑に於いて我々の最も熱心な論敵であつた。……我等の到着前に彼等は自分の宗旨が最善であると相互に絶えず論争した云々<sup>註一</sup>

又、日本布教に従ふ宣教師についても、

彼等は思はざる迫害を受くべく、日中には時間を問はず、夜中に至るまでも訪問と質疑に責められ、又身分ある人の家に招かれて辭退する能はざることをあるべし。祈禱、黙想、思索の餘暇も、精神上休養の時もなく、最初の間は彌撒を行ふことすら叶はず、絶えず質問に答へざるべからず。……彼等の質問に答ふるには學問あり辯論に巧なるを必要とし、詭辯を弄する者に對しては直に其矛盾を指摘するを要す<sup>註二</sup>

と云ひ、サヴィエル自ら規定した教義書に於いても教理問答の傳統に従つたのみならず、特に日本宗教との相違について質疑とせつゝキリシタンの教理を解説する方法を採つてゐるのである。<sup>註三</sup>

註一 サヴィエル一五五一年七月附山口發テア・ビスス會宛書翰 S. Francis Xavier, Epistolae Hongkong 1890. II. pp. 156-157.

註二 サヴィエル一五五二年一月二十九日附コチン發ロヨラ宛書翰 Cartas. I. f. 22. 村上直次郎博士譯『耶穌會士日本通信』

『聖後篇上巻』六〇頁の譯による。

註三 Frois, op. cit. S. 232.

かくして幾多の大小様々の宗論が行はれたが、それらの中、注目すべき宗論及び主要参考文献は次の如くである。

○サヴィエルと鹿兒島福昌寺忍室との會話、五五〇年(天文十九年)

史料 Frois, *Geschichte Japans*. S. 6-7.

○サヴィエルの山口に於ける諸宗論、一五五一年(天文二十年)春—夏

史料 サヴィエル一五五二年一月二十九日附コチン發耶穌會士宛書翰 Coleridge, H., *Life and Letters of St. Francis Xavier* London, 1872. II. pp. 331-340; Xavierii, *Epistolae*. II. pp. 177-203; Frois, op. cit. S. 15-16.

S. 15-16.

○パフテレ・トルレス P. Cosme de Torres 及イルマン・フェルナンデス Fr. Juan Fernandez の山口各派佛僧と大宗論、一五五一年(天文二十年)九月

史料 トルレス一五五一年九月二十九日附山口發印度耶穌會士宛書翰

フェルナンデス一五五一年十月二十日附山口發在豐後サヴィエル宛書翰 Cartas. I. ff. 16v-18v, 19-21;

Frois, op. cit. S. 22-26.

文献 Schurhammer, G., *Die Disputationen des P. Cosme de Torres S. J. mit den Buddhisten in Yamaguchi im Jahre 1551*. Tokyo 1929.

○日本ハイルマン・ロレンソと山田庄左衛門(假寛字)との宗論、一五六〇年(永祿三年)春 於京都大主堂

史料 *Trois, op. cit.* G. 97-98.

文獻 拙著『京畿切支丹史話』七八―八二頁

○イルマン・ロレンソと會下僧との宗論 一五六一年(永祿四年) 初春 於京都天主堂

史料 *Trois, op. cit.* G. 108-109.

文獻 前掲拙著 九八―九九頁

○パアテレ・フロイス *P. Luis Frois* 及イルマン・ロレンソと朝山日乗との織田信長御前に於ける大宗論 一五六九年五月六日(永祿十二年四月二十日) 於京都妙覺寺史料 フロイス一五六九年六月一日附都發マダゲイレド宛書翰 *Cartas. I. ff. 262v-263r* *Trois, op. cit.* S. 379-385

文獻 前掲拙著 一二九―一五〇頁

○伊留滿舊譯及安都 Antonio と日忠上人との宗論 慶長八年四月二十五日(一六〇三年六月四日) 於博多妙典寺

史料 邪正問答、萬代通鏡錄、筑前續風土記、石城問答(『大日本史料第十二編之一』二四五一―二四八頁)

文獻 長沼賢海博士著『日本宗教史の研究』昭和三年刊 一〇〇五―一〇一九頁

史實性の疑はしいもの乍ら、記録者側の觀念を示すものとして無視出来ないものには次の如きものがある。

○サヴァニェルとフカラッド *Fuerranodon* (深田寺)との宗論 一五五一年(天文二十年) 秋 於豊後府内史料 *Pinto, M. Peregrinagem. Lisboa. 1614. ff. 279v-281v. Crasset. J., Histoire de l'Eglise du Japon. Paris*

1669. I. pp. 128-129.

○伊留滿ハビアンと柏翁居士との宗論 元和元年(一六一五年) 於大坂

史料 「吉利支丹物語」 寛永十  
六年刊

又参考すべき儒教とキリシタンとの宗論としては次の如きがある。

○伊留滿ハビアンと林道春羅山及林信澄との宗論 慶長十一年六月十五日(一六〇六年七月二十四日) 於京都南雲寺

史料 林羅山著「排耶蘇」(『羅山文集』卷第五十六)

○宗門改役井上筑後守政重が伴天連岡本三右衛門を轉宗せしめた論議 寛永二十年(一六四三年) 七月

史料 筑後守伴天連正不審ヲ掛中詰コロバセ申候論議(「契利斯督記」『息距離』所收「天文末録下」)

文獻 姉崎正治博士著『切支丹宗門の迫害と潜伏』大正十四年刊 六七―七三、九二―一〇〇頁。○新井白石のバアテレ シドゥッティ *P. Giovanni Battista Sidotti* 取調 寛永六年十一月二十二日―十二月四日(一七〇九年十二月二十二日―一七一〇年一月三日) 於江戸切支丹屋鋪)史料 新井白石著「西洋紀聞」正徳五年刊 「采覽異言」正徳三年刊文獻 吉野作造博士著『新井白石とヨワン・シローテ』大正十三年刊 村岡典嗣氏校『西洋紀聞』昭和十二年刊

右の他宗論書として興味深く、且つ最も教理的なものとして禪僧からキリシタンに轉じた

ハビアン著「佛法次第略拔書」(假題「妙貞問答」)慶長十一年著 の上巻ならん)

があり、同じハビアンが更に棄教後、著はしキリシタンを攻撃した

ハビアン著「破提字子」元和六年刊

がある。

文獻 姉崎博士『切支丹迫害史中の人物事蹟』昭和五年刊 四六五―四九六頁。

(106)

その他佛教側には

鈴木正三著「破吉利支丹」寛文二年刊

等、明清天主教書にて直接的に佛教に對してゐるものには

利瑪竇 J. Matteo Ricci 著「天主實義」一六〇三年萬曆三十一年刊 徐光啓著「闢妄」

等があり、前者は直ちに我國にも舶載され、林羅山等も讀了してゐた書である。

更に明治初年に於ける佛耶論爭書も少参考すべきであらう。幕末民初に於いては國學、復古神道の強い潮流があり、廢佛棄釋運動も盛んに行はれて居り、儒教思想は固定化し、切支丹即邪宗門觀が既に先入主となつてゐた時であり、カトリックの再傳のみならず、プロテスタントも傳來し、前者が忽ち迫害を蒙つたに對し、後者は宗教自體としてよりも新文化紹介者として登場する等、純宗教的に見ても種々複雑なる様相を有つてゐたから自ら往昔とは異なる交渉結果を生み出した事は云ふ迄もない。然し乍ら徹底した禁教政策と、教學の沈滞とにより、宗教的理解には三百年を経た後といふ程の發展は見られない。それだけに却つて往昔の佛耶交渉資料の貧困を補ふものとして參考の價值がある。

その所謂佛教側よりの闢邪書は極めて數多く出て居り、又明治中期にかけて佛耶宗論も多くなされた事が傳へられてゐるが、それらの中、宗論的に見るべきものには次の如きがある。

○歸正居士(貞方良助)著「夢醒眞論」明治二年刊 所收「夢醒眞論」と「笑耶論」明治二年刊

文獻 拙著『切支丹典籍叢考』昭和十年刊

○艾約瑟通譯 Joseph Etkins 著「釋教正謬」咸豐十一年香港刊 所收「釋教正謬初破」明治元年刊 「并再破」明治六年刊

及び細川千巖述「破斥釋教正謬」明治二年述 同十四年刊 等。

文獻 拙稿「釋教正謬とその反響」史苑第十三卷第二號

○エミール ギメ と島地、渥美、赤松三師の問答 明治九年十月二十六日 於京都西本願寺飛雲閣

史料 干河岸貞一筆錄「問對略記附教義略答」明治十年刊

稍後になるがカトリック司祭との宗論記錄としては唯一のものに左のものがある。

○ウィリオン P. Amatus Villion と阿滿得聞との宗論 明治二十年前後 於京都愛良學會

史料 阿滿得聞著「異教對話 一名國明術」明治三十年刊

大凡主要なる宗論とその史料文獻は右の如くであるが、その一々を吟味し、或は全體を綜合し、或はこゝに擧げた他の教會側記錄や佛教側排耶書等を參照しつゝ、佛耶の內的交渉の跡を考察したいものと念願してゐる。

——昭和十八年二月五日 日本二十六聖人殉教の紀念日に——

(107)